

深江にあった戦争 2

深江塾

昭和二十年（一九四五）四月、松尾令子は本庄国民学校初等科の四年生になった。令子は本庄村で昭和十年七月に生まれた。もうすぐ十歳になる。令子の家は正時代中頃から阪神深江駅の南、大日神社近

大山村		賀栗村		前村		寺	
神倉齋	神倉齋	吉祥寺	生蓮寺	慶教講堂	長樂寺	林昌寺	神平教會
四男	四女	四女	四男	三男	六男	三女	三女
二	二	一	二	一	一	一	一
九	八	六	六	九	四	一	二
武員主郎	船橋和子	田中節子	松本周造	吉村金次	高田貞一	杉浦三子	高田貞一
朝田美義	柳家紀長子	中西マコ子	中島妙子	中島三子	高田貞一	松本好子	松本好子
中島典子	荒木ト子	足立マコ子	高橋富子	高橋富子	高田貞一	赤田為一	赤田為一
森脇静子	藤原初板	渡辺千任	松本六平	市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
羽田清子	川井隆造			市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一
				市田富子	高田貞一	永田為一	永田為一

写真1 「本庄国民学校沿革史」に記された学童疎開
神崎郡寺前村・栗賀村・大山村（現在の神河町）の寺院や教会、学校講堂に
集団疎開した

松尾米穀店は、大日神社の西を南北に通る通称「深江銀座通り」の東側にあり、深江の一等地に位置していた。現在は松尾酒店になっている。令子
の家族は、父、兄、姉、

学童疎開始まる

令子の通う本庄国民学校では昭和二十年四月二十三日から学童疎開が開始された（写真1）。初等科の三年生から六年生までの児童がその対象となった。学童疎開は空襲の被害を避けるため、子ども達を都市部から農村部へ避難させる国策に沿った行動である。疎開には集団で農村部へ行く児童と、農村部に親戚があつて個人的に受け入れてもらう縁故疎開の二通りがあつた。令子には今の兵庫県たつの市新宮町に父方の家があつた。令子は縁故疎開である。

深江からは阪神電車で三宮に行き、そこで国鉄に乗り換えた。姫路で姫新線に乗り継ぐ。屋根のない貨車である。姫新線には少なからずトンネルがある。トンネルに入るたびに令子たちは風呂敷で顔を包んだ。汽車の吐き出す煙やススを防ぐためである。本庄村は都会という

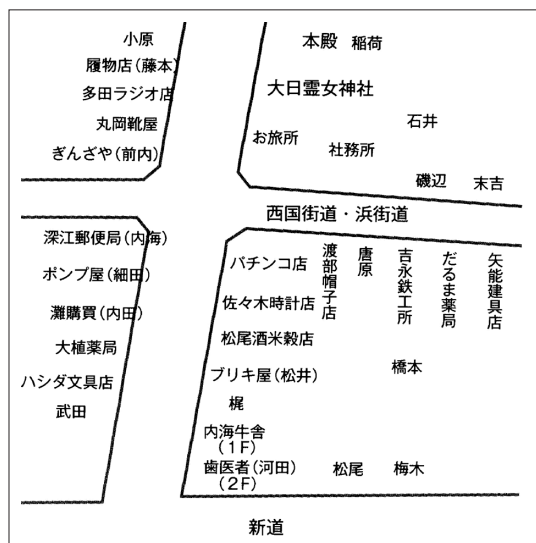


図 松尾酒米穀店と大日靈女神社

ほどではないけれど、当時の新宮町は、畑や田んぼが広がりが子供の目にもいかに「田舎」という感じがした。松尾米穀店は阪神電車の深江駅から子供の足でも二分ばかりのところにあり、店の前には常に人通りがあった。いつも人の気配が身近に感じられた。

その意味では令子は都会の子であったかもしれない。

疎開地については令子も家事の手伝いをした。牛の世話、その飼料となる草刈りが主な仕事であった。深江では遊びとして土いじりをすることはあっても生活のために草や土にふれることはなかった。やはり町の子であった。

深江の家に帰りたい

疎開地に着いたその時は、明日からどんな生活が始まるのだろうかというぼんやりした期待もあった。子供らしい単純な思いである。疎開地で初めての夜、寝床に入ると令子は「父や母は今頃どうしているのだろうか」、「私がいなくなって不安に思っていないだろうか」と自分自身の身の上の不安よりも父や母のことが気になった。

日差しがある時間には、「あっちのほうには我が家があるのだ」と東の空を眺めた。日暮れになれば飼っている牛が「モウ」と啼く。令子にはその牛のやさしく牛が何かを求めているような声に聞こえる。夜、寝床につけば父母の顔が浮かんでくる。自分に向かって笑っている顔、自分を叱っている顔、さらには自分に向かって話しかけている言葉の数々が次々と胸のうちを通り過ぎる。父母の姿や表情、身振り手振り、言葉が十歳の令子の胸に錘の石となってくる。

何度も寝返りを打つ。遠くで列車の走る音が聞こえる。汽笛の音が聞こえる。汽笛の音の尾が消えていくときは自分の体まで消えていくような心細さがあった。「あの列車に乗れば家に帰れる」「今からでもすぐにあの列車に乗りたい」。そして「どんなに叱られてもいい」。いや「その叱る父や母の声が今すぐ聞きたい」という思いが体の底から

湧いてきた。次々に浮かんでくる思いと共にその数だけ涙が頬を伝った。

五月の半ばになって突然は母がやってきた。令子は「一緒に帰れる」と喜んだ。母は言う。「深江には五月の十一日に大きな空襲があった。たくさんさんの爆弾が深江に落とされた」「たくさんさんの人が死んだ」「多くの家が壊れた」と。その話から空襲が怖いものだと思っていたけれど、それ以上に「母と一緒にいられるなら怖くない」「早く家に帰りたい」と訴えた。母は、「もう少しがまんしなさい」「必ず迎えに来るから」と涙を流すわが子を突き放した。

五月十一日の川西航空機の工場を目標にしたB 29爆撃機の圧倒的な空襲の破壊と村の惨状を知る大人の行動であった。「帰りたい」というわが子を残して再び深江に帰る母はまた身を裂かれる思いであったに違いない。

母が深江に帰った後、令子の心には単に家に帰りたいという気持ちとは別の不安がよぎるようになった。「父や母が空襲で死ぬのではないのか。家族が死んで自分だけが取り残されるのではないか。もしそんなことがあるのなら、いっそ自分も父や母のそばで死んだほうがマシだ」という思いである。

疎開して三カ月が過ぎようとしていた。入道雲が湧く。稲の緑が波打っている。夜になるとカエルの合唱が聞こえる。神戸のほうでは何度も空襲があり家が壊され人が死んだといううわさも聞こえてくる。「必ず迎えに来るから」という母の約束を信じて令子は日々を過ごした。

昭和二十年八月五日の朝、母がやってきた。「迎えに来た」という。令子には空襲の怖さよりも父母の側にいつもいられるという気持ちが強かった。深江に帰る列車の中で、五月十一日の本庄の村や深江の惨状を聞いたような気がする。しかしあの日から七十年を過ぎた今日で



写真2 空襲を受けた大日靈女神社付近

は子供心にはただ深江に帰れることのうれしさばかりが記憶に残っている気がする。

我が家に帰ったその夜に

八月五日の夕刻に深江の我が家についた。深江を離れてからちょうど三カ月が過ぎていた。五月の空襲のことも聞いていたけれど我が家は自分が疎開する前と同じようにそこにあった。松尾商店は、深江駅から南に向かう通称「深江銀座通り」に向かって西に店が開いている（平成の今と変わらない店構え、図1）。通りに面して店と住居。店の裏、東側に幅四呎ほどの空き地を隔てて平屋の倉庫が建っている。店と倉庫の間の空地に防空壕が掘られていた。

壕は畳二枚ほどの広さで、深さは大人が座って頭が隠れるほどである。

五日の夕刻、夏の夕暮れの明るさの残るなかで令子たちは三カ月ぶりに家族で粗末な夕食をとった。家に帰った安心感の中で令子たちはたちまち寝入った。深夜、彼女はサイレンの音を聞いた気がした。父が叫びながら「防空壕に入っておれ」と追い立て、壕に誘導し

た。父は家族が壕に入るのを確認し、軍服姿で外に出て行った。父は警防団のリーダーとして警報が鳴るたびに近隣を見回っていた。灯火管制のもと、真っ暗な中で壕の中でうずくまっていた。轟々と爆音が響いている。令子には「空が割れる」様なひびきに聞こえた。母が「お父ちゃんはどうしているやろ」とつぶやく。

女子供が壕の中でおびえ座り込んでいたとき父が走りこんできた。「ここにいたら死んでしまう」「すぐに逃げろ」とせきたてた。はいずるように令子たちは壕を出て倉庫の裏を廻った。店の屋根の上でカンカンと金属音が聞こえる。焼夷弾が屋根瓦にぶつかる音である。倉庫と隣の家の間には子供の背丈ほどの生垣があった。彼女たちが倉庫を抜けて生垣のそばに来たとき目の前に焼夷弾が落ちてきた。焼夷弾は落ちると同時にカッと火の手が上がる。見る間に生木が燃え出した。屋根瓦の上で燃え出した焼夷弾の油脂が火のついたまま軒下に流れて落ちてくる。それは「火の雨だれ」のように見えた。火のしずくを見るたびに立ちすくむ。

火に追われて

北にある大日神社のほうへ向かった。何軒かの家の間の路地を抜けてとおりを隔てたところが大日神社である。走り抜けようとした路地にある家に焼夷弾が落ちてきた。屋根を突き抜けた焼夷弾がはじけてブワッと火の手が上がる。令子は動けなくなった。座り込んでしまった。いわゆる腰が抜けた状態である。父が「立って」と叫ぶ。令子は「靴がない」と答える。父は「そのまま来なさい」と令子を引きずる。彼女たちは大日神社の南の通りに出た。この通りは芦屋方面から深江を東西に抜ける「西国浜街道」である。道が燃えていた。令子には地面全体が火を噴いているように見えた。闇の中だけになおさらに全てが燃えていると見えたのであろう。神社を北に見て西に向かう。浜街道と銀座通りのあたりで幾組かの家族が「何処に逃げよう」「どうし

よう」といつているのだろう。何かを叫びながらうろついている。気が動転しているのである。自分がなにをしているのかどうしたらよいのやら判らなくなっているのであろう。爆弾の音も恐ろしいけれど焼夷弾による火災は動物としての本能的な恐怖心を起こさせるようであった。

この頃の日本の大都市に対する焼夷弾空襲の多くは夜間であった。無差別爆撃という無慈悲なひびきのある言葉があるけれど、この夜間の焼夷弾空襲は、人間の恐怖心を極限にまで追い詰める心理的效果があったのではなからうか。

父が神社の西南かどに立って「高橋川へ逃げろ」と怒鳴りながら指差す。うろたえていた人たちは我に返ったように三人、五人とそれぞれが固まりになっておおよそ一〇〇ほど先にある川に向かった。幅が二層ばかりの「深江橋」がある。橋の下の周囲には二〇人ばかりの人たちが体を寄せ合って集っていた。

川の水面が燃え出した。焼夷弾の油脂が川に流れだし、それに火がついたのだろう。燃える油の塊が次々と流れてくる。その火の手をあげるかたまりが数を増し川面全体が燃えているようになってきた。火の川である。川の東西に並んで建っていた住宅にも火の手が上がった。令子は顔が熱くなって痛いくらいになっているのに体が震えた。齒が鳴るほどの震えである。

爆撃の終わったあとで

どれくらい時間が過ぎたのであろうか、大粒の雨が落ちてきた。子供の指の爪ほどの大きさの雨粒である。体にかかる雨粒はなにやら黒いススのようなものを含んでいた。黒い雨である。ひとしきり激しく降った黒い雨が止んだとき、燃え出した周りの家の火は収まっていた。

川の岸を上がって家のほうへ戻ろうと歩き出した。爆音が聞こえて

きた。第二波の空襲だと皆は再び高橋川に戻った。川は水面に火のついた油を点々と浮かべて流れている。川には入れなかったので岸に上って大日橋を西に渡って本庄国民学校（現・本庄小学校）のほうに逃げた。学校の東の一角には緑の葉が空を覆うように繁らせた大木がいくつもあるおきな屋敷が何軒もあった。その家は多羅尾さんや岩谷省三校長先生の家であったと令子は記憶している。聞こえていた爆音は遠ざかっていた。飛行機からは爆弾は落ちてこなかった。

真夏の夜が明けてきた。八月六日の朝である。高橋川から東にある自宅に戻った。自宅前の通りの南の方で人が倒れているのが見えた。三人の大人のようであった。遺体である。男の人が二人仰向けに、一人の女の人でうつぶせに倒れている。煙にまかれて窒息して死んだのか。体が異様に膨らんでいるが焼け焦げた様子はない。女の人の手の先には、数個のジャガイモと玉葱が散らばっていた。

ご遺体は七日の朝、消防団の人たちによってどこかへ運ばれていった。消防団の人たちがご遺体の下に太い木を両側から差し込んで大八車に載せた。

松尾商店の周りの家はみんな焼けてしまっていた。松尾商店の店も倉庫も焼け落ちていた。店に置いてあった大量の玄米が焦げて盛り上がるように固まっていた。完全に夜が明けた頃「営団」の人という役所の人が数人やってきた。彼らが父に言う。「米は誰にも手をつけさせるな」と。父はその夜は営団の人の言われるままに番をした。

すっかり暗くなった頃、松尾商店の近くにあった「銀鈴」という喫茶店の女の人が来た。「病気で動けない息子が、空襲の前から何も食べていません」「茶碗一杯で結構ですから、お米を分けていただけませんか」と頭を下げる。役人から「誰も米には手を付けさせな」と命令されている。父はその女の人の無言で背を向けた。後でその女性が頭を下げている気配を感じながらその場を離れた。

空全体が白み始めた頃、父はあの女性が立っていた場所に戻った。火災で表面全体が焼けこげ、空襲の後の雨で湿った米の山の一箇所に、ちょうど茶碗1杯分をすくった後が残っていた。すくったその部分だけに焦げ目のない米が見えた。父はなぜか「ほっとした気分になった」と後日、語っていた。六日の夜が明けた頃、役人を乗せたトラックがやってきた。彼らは米の山を袋につめトラックに載せるとそのままどこかへ立ち去った。

松尾商

店をはじめ阪神深江駅から南側一帯は、ほとんどの家が焼失していた。人々はかろうじて残る家の基礎石を見て、そこが自分の家であることを知る。令子たちは六日の夜



写真3 疎開から戻った本庄小5年生
(昭和21年、藤本吉江氏提供)

は深江駅の北東に工場と社宅を持つ北城ハッカ会社に行った。その会社の経営者が父の友人であった。松尾の家族はその父の友人の厚意に甘えて社宅の一つを提供してもらった。

七日の朝、令子たちは母の実家である芦屋の三条町に移った。しかし、実家といえどやはり一度は嫁に出た家である。長居することがはばかられた。松尾の家族は八月十日の朝、父の実家である新宮町へ行くことになった。令子にとっては縁故疎開でついこの間までいたところへ舞い戻ることになったのだ。今日は一人ではなく家族も一緒であることが救いであった。

令子たちが新宮の駅に降りたとき、その列車に乗りとうとする兄の福夫と会った。福夫は陸軍の学校に行っていたが神戸が空襲にあったということで家族の安否確認のため、当地にやってきたのである。兄は新宮駅から再び神戸へ帰ろうとしていたところであった。一列車遅えば家族が一堂にそろうことのない奇遇であった。

八月十五日正午、大人たちはラジオの前に集まっていた。令子はラジオ放送が終わって呆然としている大人たちを見て叔母に「何の放送だったの」と聞いた。叔母は「天皇陛下のお話じゃった。日本が戦争に負けたということじゃ」と。令子は戦争に負けるということが何を意味しているのかよくわからなかった。戦争に負けた悔しさとか悲しみはなかったような気がする。

「もうB29はやってこない」「あの、空の割れるような音がする空襲はなくなる」「深江に帰れる」という喜びが湧いてくる気がした。涙がぼろぼろとこぼれた。

松尾（現姓大西）令子氏は深江生まれ、深江育ちで現在、深江南町四丁目在住である。その体験談を深江塾の森口健一が三回にわたり聞き取りしてまとめ、深江塾で検討の後、大國が加筆修正したものである。